經濟論叢 毎月一回發行
第四十七卷第一號 昭和十三年七月一日發行
大正四年六月二十一日第三種郵便物認可

京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第四十七卷 第一號

昭和十三年七月一日發行

論叢

「むすび」の道と統營經濟……經濟學博士 作田莊一

清算貿易制の諸形態……經濟學博士 谷口吉彥

時論

戰時の農業政策……經濟學博士 八木芳之助

消費節約に就いて……經濟學士 柴田敬

研究

ナチス革命の原理と價値の轉換……經濟學士 中川與之助

生命保險料の一考察……經濟學士 近藤文二

資本の流動化と再投資に就て……經濟學士 有井治

日本莊園の構造……經濟學士 江頭恒治

貿易理論について……經濟學士 松井清

說苑

貨幣の本質と價値……經濟學士 岡橋保

問屋制工業の資本主義的性格……經濟學士 堀江英一

附錄

彙報

外國雜誌論題

（禁轉載）

第四十七卷　一四二　第一號　一四二

問屋制工業の資本主義的性格

——ゾムバルトの見解を中心として——

堀　江　英　一

一　問屋制工業（Verlagssystem）（註一）の二つの型

問屋制工業の本質——ゾムバルトに於てはそれは資本主義的性格のことである——に這入るに先立つて、問屋制工業のもとに普通に理解される本質を異にした二つの定型を區別せねばならぬ。即ちその一はゾムバルトの所謂本源的（ursprunglich）或は純粹の意味に於ける（rein）問屋制工業即ち前貸制度であり、他は生産的（produktiv）問屋制工業即ち資本主義的組織としての問屋制工業である。

（註一）Verlagssystem 或は Verlag は本來の意味に於ては Vorschusssystem 即ち前貸制度である。それが轉化して資本家的家内勞働をも意味するに到つた。私はこの轉化した意

味に重點を置いて問屋制工業と譯した。尙ほ問屋制工業と家内工業の關係につきビュッヒャーは「論理的には問屋制工業の勞働關係のみが家内工業と呼ばるべきである」と述べてゐる。[1]

(1) 純粹の意味に於ける問屋制工業　これは『貨幣所有者と工業生産者との間の一種の合生 (Symbiose) 卽ち窮乏に陷つた手工業者がその經營を續けうるために貨幣所有者が或る貨幣額を彼に前貸すること』[2]である。貨幣の代りに生活資料や生産手段が前貸されても事情に變りはない。[3] 從つてこの場合には單純な高利貸資本の外に、商業資本の諸形態卽ち(イ)一定額の貨幣貸與に對しその工業生産物により返濟を受ける場合、(ロ)生活資料或は生産手段を貸與して、その工業生産物により返濟を受ける場合が含まれる筈である。かくて『純粹の意味に於ける問屋制度契約の締結は究極するところ分配過程であつて』、[4] それ自身新しい生産秩序の成立を意味しない。

(2) 生産的問屋制工業　『貨幣貸與者が生産指揮を擔任するに到るや否やすべての關係は完全に變る。その時から財の生産そのものに變化が、……その源泉を經營形態のうちに有する改良が行はれるが故に、その時から生産秩序が變るのであり、その時から資本主義的組織が始まるのである。』[5]

生産的問屋制工業はかくの如き『資本主義的組織』としての問屋制工業のことであるが、以下これについて述べよう。尙ほ特別の斷りなき限り問屋制工業は生産的問屋制工業を指す。

二　問屋制工業の本質

先づゾムバルトに於ける問屋制工業の規定から始めよう。『家内工業(問屋制工業)とは勞働者を彼の自宅又は仕事場に於て使用する資本主義的企業の一經營形態である。卽ち資本主義的企業家たる問屋 (Verleger) が生産指揮に任じ、彼は生産の方向及び程度を決定して自宅又は仕事場で働く勞働者に注文を發する。然し彼れの生産支配權は生産物の生産に要する生産手段の所有に基くよりも(生産手段の一部分は多くの場合勞働者の手中にあるから)寧ろ商品市場の智識及び支配(彼の商

1) K. Bücher; Gewerbe—Handwörterbuch der Staatswissnschatten. Bd. IV. Aufl. IV. 1923. S. 986.
2) 3) W. Sombart; Die moderne Kapitalismus. Bd. II. HbBd. II. Aufl. II. 1928 S. 708.
4) Vgl. W. Sombart, a. a. O. S. 722-724.
5) W, Sombart, a. a. O. S. 724.

人的性格)及び原料の調達・製品販賣に必要な資本の所有に基く。[6]』生産指揮とは『生産の方向及び程度を決定して自宅或は仕事場で働く勞働者に注文を發すること』即ち注文に外ならない。家内工業には二形態がある、その一は自宅で單獨或は家族と共に勞働に從事する家庭勞働(Heimarbeit)、他は特に設けられた仕事場に於て家内工業者が賃勞働者を使用する仕事場勞働(Werkstattsarbeit)である。[7] 商業資本がかゝる家族或は仕事場經營者に生産物の注文をなす時、問屋制工業が成立し、商業資本は資本主義的生産企業に轉化する。從つて資本主義的大經營即ち工場手工業及び工場に對しては問屋制工業は勞働者の分散及び勞働の分散の二點に於て區別される。[8]

我々は更にゾムバルトが彼の「經營」(Betrieb)と「經濟」(Wirtschaft)を述べるに際し、[9] 極めて斷片的に觸れた問屋制工業に關する見解に基いて、更にこの點を追求して見よう。

周知の如くゾムバルトに於ては經營は繼續的な仕事

遂行の目的のための設備(Veranstaltung zum Zwecke fortgesetzer Werkverrichtung)即ちマルクスの所謂勞働過程を意味した。[10] 經營が勞働過程を意味する以上、經營單位が勞働過程の統一性により決定されねばならぬことは云ふまでもない。勞働過程の統一性を規定する要素には次の三つがある。(イ)勞働過程の開始(Einleitung)—生産要素の調達、(ロ)勞働過程の形成(Gestaltung)—いつ、どこで生産するかの決定、(ハ)勞働過程の實施(Ausführung)—指揮監督の統一性、是である。[11]

家内工業者の經營は統一的に秩序づけられた・完結した經營である。何となればそれは上述した三要請を滿足してゐるからである。即ち(イ)家内工業者は仕事の實施(Ausführung eines Werkes)を内容とする勞働過程の組織者である——彼は生産に必要な生産要素を調達する、その場合道具・原料を問屋から供給されること、それは財産法的關係を表すだけでこゝではどうでもよいことである。(ロ)彼は生産の場所(自宅か仕事場か)と勞働時間(開始・終了・休息)を決定する。(ハ)彼は監督即

6) W. Sombart, Hausindustrie—Handwörterbuch der Staatswissenschaften. Bd. V. Aufl. IV. 1923. S. 179.
7) W. Sombart, a. a. O. S. 172-174.
8) W. Sombart, a. a. O. S. 180.
9) Betrieb と Wirtschaft に關しては W. Sombart, Die gewerbliche Arbeit und ihre Organisation—Archiv für Getzgebung und Statistik. Bd. XIV. 1899.

ち經營警察 (Betaiebspolizei) を行ふ。これら三要素は一つの家内工業者に於ては統一的に秩序づけられてゐるに反し、異る家内工業者に於て夫々異るであらう。[12]

それ自體に於て統一性を有する家内工業者の經營が如何にして問屋の『勞働者』と見られ得るか。それを解決するのが經濟であるが、この點に關しゾムバルトは次の如く述べてゐる。『現代の出來合服店 (Konfektionshaus) は次の如き經營を包含してゐる。即ち注文を受け注文品を渡す帳場經營、出來上つた商品を蓄へる倉庫經營、多くは小賣經營即ち店舗(然し往々缺けてゐることもある)、比較的大きい修繕及び裁斷工場、最後に衣服を完成する長い系列の小規模家内工業經營。これらすべての技術的に獨立した經營の經濟的統一は貨幣利得を追求する資本主義的目的により確保されてゐる』[13] ゾムバルトはかゝる統一的家内工業經營を問屋の直營する工場その他の經營と等一視してゐる。從つてゾムバルトに於ては家内工業者の經營は問屋企業内の一經營であり、問屋企業はかくて生産企業になる。自己經營と家内工業者の經營が同一視される所以は、共に生産指揮權—實質的には注文—が問屋に屬するからである。

我々はかくてゾムバルトの見解に於て既に古い命題たる『外業部』(註二)[14] (auswärtige Departement) 『分散的大經營』[15] の思想が繼承されてゐるのを見る。而も從來のこの系統の思想に比し、一方家内工業者の經營の工場或は工場手工業勞働者に對する相異を、他方家内工業者をして問屋制生産者——ゾムバルトに從へば『勞働者』——たらしむる基準を、より明確に提起したことによつて區別される。

(註二) 但しマルクスに於ては『所謂近代的家内工業』(die sog. moderne Hausindustrie) を賃銀制の問屋制工業のみに限つた。その點に於て賃銀制・買取制の兩問屋制工業を含ましめたゾムバルトとマルクスとの相異がある。[16] 而も後に述べる如く、この相異は單に形式的な相異にとゞまらなくなる。

ところで生産指揮即ち單なる注文が家内工業者を問屋企業の『勞働者』たらしむるとすれば、問屋制工業は必然的に買取制の問屋制工業と賃銀制の問屋制工業を

殆んど同文の W. Sombart, Die moderne Kapitalismus. Bd. I. Aufl. I. 1902. Einleitung がある。こゝでは後者を利用する。

10) W. Sombart, Der moderne Kapitalismus. Bd. I. Aufl. I. S. 5.
11) W. Sombart, a. a. O. S. 12.
12) W. Sombart, a. a, O. S. 12–13.
13) W. Sombart, Die Element des Wirtschaftslebens—Archir für Sozialwissens-

含まねばならぬ。[17] 然し例へば農民が自己生産の原料、自己の勞働手段を使つて問屋の注文品の生産に從事した場合、この農民は問屋の『勞働者』と云へるであらうか。我々は買取制の問屋制工業をも新しい生産秩序と見るゾムバルトの見解に贊同するを得ない。(註三) かゝる買取制の問屋制工業と賃銀制の問屋制工業との混同は彼をして工業發展段階に於ける問屋制工業の地位決定を誤まらしめてゐる。

(註三) ビュッヒャーはこの點に於て蹉跌してゐる。彼は同一問屋のもとに立つ家内工業者間の分業を買取制のもとに於ては Spezialisation 賃銀制のもとに於ては Zerlegung とした。即ち前者を社會的分業、後者を問屋企業内部の分業とすることに依つて無意識的であるが自己の見解の矛盾を暴露してゐる。[18]

三　問屋制工業の歴史的地位

上述したところに於て我々はゾムバルトが何故に問屋制工業を資本主義的組織と見たかといふことを明かにし、最後にこれに對する疑問を提出して置いた。この疑問は彼が資本主義工業の發展に對する問屋制工業の役割について述べたところを明らかにすることに依つて更に明瞭になるだらう。問屋制工業の役割に關しゾムバルトは次の諸點を掲げてゐる。

(イ) 勞働の國民經濟的生産性 (volkswirtschaftliche Produktivität) の增進。問屋制工業の成立それ自身は原則として勞働過程の變革を意味するものでなく、從つて勞働の生産力の增進を意味しない。然しそれは他方に於て農村勞働力及び都市の半勞働力を工業生産に惹き入れることに依り、一國の生産力總量を增加せしめる。[19]

(ロ) 問屋制工業の成立は原則として生産力の增進を意味するものでないが、尙ほ生産が問屋の統一的指揮のもとに營まれるが故に同一問屋のもとで勞働する家内工業者間に單純協業と同一の效果が表れ、勞働者の能率がたかめられる。[20] 然し勿論この能率の增進は勞働の强化の結果に外ならない。

(ハ) 勞働の能率は商品の品質の改良によりたかめられる。即ち問屋は模型或は見本を家内工業者に支給し、

chaft und Sozialpolitik. Bd. 37. 1913. S. 34.

14) K. Marx, Das Kapital. Bd. I. Volkoausgabe. S. 763 (長谷部譯資本論 I, 763頁。)

15) O. Schwarz, Die Betriebsformen der modernen Grossindustric—Zeitschrfft für die gesamte Staatswissenschaft. Bd. 25. 1869. S. 546.

16) Vgl. Stieda, Literatur, heutige Zustände und Entstehung der deutschen

かくてより完全な商品の生産が可能になる。[21] このことに依り或程度まで商品の標準化が可能になり、近代産業の特徴たる頭脳と筋肉との分離の萌芽がこゝに既に見られる。

(ニ)勞働の能率は更に生産手段利用に於ける經濟化(ökonomisierung)によりたかめられる。生産手段自體には未だ進歩は見られないが、その大量調達及び家内工業者への合理的分配により生産手段はより有效に利用される。[22]

(ホ)問屋制工業に於ける特化(Spezialisation)即ち問屋經營と家内工業者の經營、或は同一問屋のもとに立つ家内工業者相互間に分業と行はれ、著しく勞働の能率がたかめられた。かくて問屋制工業に於て準備された特化と協業は資本主義大經營に於て始めて自由なる活動舞臺を得たのである。[23]

資本主義大經營が一方廣大な市場を前提しなければならぬと共に、他方それが持つ必然性により市場を自ら開拓することを使命とするに反し、問屋制工業は寧ろ開拓された市場を利用することを使命とする。[24] こうした生産力の停滯性をその特徴とする問屋制工業のうちに生産力の增進と勞働の社會化即ち進歩性を認めたことは確かにゾムバルトの卓見であるに相違ないが、こゝではこの問題にこれ以上立入らない。問題は彼が問屋制工業を以て資本主義的經營の最初の段階、資本主義的大經營の準備段階と認め、[25] 問屋制工業に於て成長した分業が資本主義的大經營の技術的礎地を作つたとする點に存する。

然しゾムバルトの如く問屋制工業を以て資本主義的大經營の前段階と認めるならば、問屋制工業に於て支配的となつた分業の成立は說明し得られない。分業が勞働過程の技術的分裂の可能性を前提しなければならぬことは述べる迄もないが、かゝる技術的分裂は歷史的に資本主義的大經營に於て始めて確立されるのであつて、單に中世的技術と規模に立脚する家内工業者の經營そのものゝうちからは起り得ないと見るのが至當であらう。從つて問屋制工業に於ける分業は少くとも

Hausindustrie—Schriften der Vereins für Sozialpolitik. Bd. 39. 1889. S. 9–10.; W. Sombart, Hausindustrie in Deutschland—Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialdolitik. Bd. 4. S. 109.

17) W. Sombart, Hausindustrie in Deutschland a. a. O. S. 109.

18) K. Bücher, Gewerbe—a. a. O. S. 986. 尙ほ分業の概念規定に關しては Entstehung des Volkswirtschaft. Sammlung. I. S. 399.

一般的には資本主義的大經營を前提しなければならぬ。

然るに買取制の問屋制工業に於ては普通分業は行はれず、分業の專ら支配的な問屋制工業は賃銀制の問屋制工業である。[26] 勿論賃銀制の問屋制工業と雖も全然分業の行はれない場合も存するが、典型的な賃銀制の問屋制工業、從つて自然發生的でなく經營形態として意識的に創出されたそれには、普通分業が支配的であることは纖維工業等に於て明らかに見られる。從つて買取制の問屋制工業は必ずしも資本主義的大經營を前提することを要しないが、賃銀制のそれは資本主義的大經營が既に歷史的に成立してゐることを前提とせねばならぬ。かくてゾムバルトの買取制の問屋制工業と賃銀制との區別の無視は、兩者の歷史的段階の決定をも誤まらしめた。

四　結　論

上述した如くゾムバルトの所謂生產的問屋制工業或は資本主義的組織としての問屋制工業には、その本質と歷史的段階を異にした買取制の問屋制工業と賃銀制の問屋制工業の二形態が含まれてゐるが、資本主義的(產業)組織としての問屋制工業は賃銀制のそれであつて、買取制のそれは先資本主義的組織或は單純な商業資本的關係にすぎない。賃銀制の問屋制工業は次の如き諸點から資本主義的(產業)組織であると見られ得る。

(1)商業資本の純粹の形態は、同一の商品を利益を得て販賣するために商品を買入れることにある。然るに賃銀制の問屋制工業は問屋が原料その他の生產手段を仕入れ、これを家內工業者に加工せしめて販賣するのであるから、問屋の購入品と販賣品とが異り、しかもその間所有權の移轉がないのであるから、問屋は既に商業資本家ではなくて產業資本家である。[27]

(2)家內工業者はゾムバルトの述べる如く獨立の勞働過程の擔當者であるが、彼等は既に市場關係から遮斷されてゐるのみならず獨立の生產者たる資格を奪はれてゐる。原料その他の生產手段は問屋の所有に屬し、

19) W. Sombart, Die moderne Kapitalismus. Bd. II. HbBd. II. Aufl. II. S. 625–6.
20) W. Sombart, a. a. O. S. 727.
21) W. Sombart, a. a. O. S. 727–8.
22) W. Sombart, a. a. O. S. 728.
23) W. Sombart, a. a. O. S. 728–9.

彼等は單に勞働力の販賣者・勞働の提供者にすぎない。かくて問屋は產業資本家としての實質を具備して居り、家內工業者は特殊な勞働者である。こゝに問屋制工業の資本主義的(產業)組織としての一般性と特殊性が見られる。

(3)かくて家內工業者は、經濟的に問屋に從屬してゐるが、それのみならず家內工業者は技術的に問屋に從屬してゐる。既に述べた如く賃銀制の問屋制工業に於ては分業が支配的であり、從つて家內工業者の技術は一商品生產技術の一分化にすぎないのであるから、その技術は問屋によるすべての家內工業者及び自己經營の技術の統一を通じて始めて一商品の生產技術たり得る。家內工業者の技術は問屋に從屬することに依り始めて一商品の生產技術たり得る。

等しく問屋制工業なる名稱のもとに含まれるものに(イ)純粹の意味に於ける問屋制工業(ロ)買取制の問屋制工業(ハ)賃銀制の問屋制工業があるが、資本主義的(產業)組織としての問屋制工業は賃銀制のそれ以外のものであり得ない。そして賃銀制の問屋制工業が典型的な形態に於て表はれるのは工場手工業的段階に於てゞあつて、それが支配的になつたのはドイツ歷史學派の傳統的學說の如く資本主義(產業)組織の第一段階に於てゞはない。

24) K. Bücher, Gewerbe—a. a. O. S. 989.
25) W. Sombart Der moderne Kapitalismus. Bd. II. HbBd. II. Aufl. II. S. 724.
26) O. Schwarz, a. a. O. S. 546-9.
27) Lexis, Handel—Handbuch der politischen Oekonomie, Aufl. IV. Bd. II. HbBd. II. S. 236-7. 反對說 Liefmann, Über Wesen und Formen des Verlags (Hausindustrie) 1889. S. 40.